

東京家政大 家政 〇神田和子 湘北短大 本田雪子  
 東京農工大 木工 木下陸肥路

目的 すでに提案した袴型の作図法である三点図法は、頸椎点からの下り寸法 $d_1$ および頸側点からの離れ寸法 $d_2$ を定め、それらによって、上り袴肩明き寸法 $l_0$ と上り繰越し寸法 $l_1$ を採寸する方法である。この方法によって製作した長着の着装時の袴の形態と $d_1$ 、 $d_2$ との関係を解明することが本研究の目的である。

方法  $d_1$ 、 $d_2$ を指定しても、体型によって $l_0$ 、 $l_1$ は異なるので、今回は標準体型とみなされるLIRICA 9号のスタンドを使用することとした。 $d_1 = 10 \sim 50\text{mm}$ 、 $d_2 = 10 \sim 50\text{mm}$ について10mm間隔に $l_0$ 、 $l_1$ を採寸し、それぞれについて三点図法により作図を行い、衤先点での身頃の袴付け線の傾斜寸法を10mmとして袴の型紙を作製した。縫製は浴衣地を用い袴幅55mmの袴とした。これらの長着をスタンドに $d_1$ 、 $d_2$ を指定通りに着装し、袴の形態表現として、袴の打合せ点を一定にした時の袴の打合せ角、衣紋角、袴の稜角を測定した。

結果 打合せ角は、頸窩点から袴の打合せ点までの寸法が大きくなれば小さくなり、 $d_1$ にはほとんど影響されず、 $d_2$ の増加と共に大きくなる。衣紋角は、打合せ寸法にはよらず $d_1$ の変化により影響され、 $d_1$ の増加と共に増大し、 $d_2$ の増加につれてわずかに減少する。袴の稜角は、打合せ寸法が増せばわずかに大きくなり、 $d_1$ の増加と共に増大し、 $d_2$ の増加と共に減少する。これらの結果は $d_2 = 30 \sim 50\text{mm}$ について導かれた。 $d_2 = 10 \sim 20\text{mm}$ の長着はこのスタンドでは指定通りの着装は出来なかった。